



奈良朝 廢寺

仏教の伝来

近江の国は早くより渡来人の移入がありました。渡来人は高句麗・百濟・新羅の人々で、彼等のほとんどは大陸の高度の文化と技術を身につけていました。渡来人は古来と今来の二様に分けられていますが、今来は六世紀に入ってからわが国に来た人々で、特に百濟から来た人を今来漢人と称しました。

仏教の伝来は、史書によると欽明天皇の戊午年（538）百濟の聖明王が仏像・経教・僧などを天皇に献じたとするのが始めですが、実際にはそれよりも早く六世紀の始めの頃には既に今来の渡来人によって仏教が伝えられていました。百濟は四世紀中頃に建国すると中国より仏教を受け入れて、六世紀中頃より仏教美術の展開を見せるようになります。崇峻天皇元年（588）蘇我馬子の依頼によって百濟より仏舎利（釈迦の骨）・僧侶・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工などが来朝して、蘇我氏の氏寺である飛鳥寺が建て始められ、推古天皇4年（596）には一応工をなしてあげています。

近江で寺院が建立されるのは、文献では天智天皇が大津京の西北に創建された崇福寺を嚆矢とします。それと前後して渡来人による氏寺も建てられていきますが、この氏寺は寺跡より出土する当時の瓦の外にはこれを裏付ける史料がありません。最近の調査によると、飛鳥時代の寺跡ではなかろうかとされるものが、大津市堅田衣川町より検出されてはいるものの、一部の調査にとどまっていて、確定付けるには十分ではありません。

奈良時代とは、大化改新より山城に都が遷

されるまでの約一世紀半近くをいいます。この間、短期間ではあったが、大津京・紫香樂京と都が二度もこの近江に所在したこともあって、崇福寺・甲賀寺・近江国分寺・国分尼寺・石山寺のように国家的寺院が生まれましたが、他はすべて氏族の建てた私寺でした。しかも私寺である氏寺は湖東・湖南とくに大津市内・草津市の湖岸寄り・日野川と愛知川の流域に蟠集していました。これらの地域の多くはかつて渡来氏族が定着していたと考えられる場所で、彼等の私寺が多かったのもうなずけます。

近江の奈良朝寺院

近江の奈良朝寺院で、文献から知ることのできるものは崇福寺・甲賀寺・石山寺で、逸名で瓦・礎石以外の資料を出土している寺跡には南滋賀廢寺・雪野寺・石居廢寺などがあります。

崇福寺跡は大津市滋賀里町にあって、天智天皇7年（668）に創建され、天平元年（729）8月には官寺となっています。堂宇とその安置仏については、金堂に丈六の弥勒像と脇侍二菩薩像、講堂に薬師仏と脇侍二菩薩像、小金堂に阿弥陀仏と脇侍二菩薩像、三重塔に四方仏と脇侍二菩薩像を安置したとあって、昭和13年・14年の両年に寺跡の発掘が行われたところ、二つの溪流で分けられた三つの尾根上にこれ等の堂宇の礎石が整然と検出され、種々の出土品がありましたが、中でも塔跡より出土した舎利容器（国宝）は、わが国での最も代表的なものとして法隆寺塔心礎納置の舎利容器と比肩されています。

甲賀寺は甲可寺とも書かれ、崇福寺が天智

天皇の大津京遷都に伴う御願寺であったと同様に、聖武天皇の紫香樂京遷都につれて建立されました。聖武天皇は天平14年（742）8月紫香樂宮造営を開始されますと、その翌々月である10月には廬舎那大仏造営を發願されました。この甲賀寺こそはこの大仏を安置する寺であって、天平15年11月にはここで大仏の体骨柱が建てられ、天皇は親しくその繩を引かれたと記録されています。その後間もなく紫香樂京が廃止されると大仏造立も中止され、天平19年（747）奈良春日山麓金鐘寺の横に東大寺の寺域が定められて、ここで大仏の鑄造が再開されました。鍍金するための金も大量に陸奥の小田（現在の岩手県小牛田付近）から出て、この喜びを寿いだ大伴家持の長歌が万葉集に載っています。天平勝宝4年（752）4月には盛大に大仏開眼供養が行われましたが、これが奈良東大寺の大仏です。大仏のほか甲賀寺に安置される予定で造立中の諸仏も、天平19年には東大寺に移され、甲賀寺は紫香樂廢都と共に一たんは近江国分寺となりましたが、近江国衙が瀬多（現大津市神領町）にあった関係から、近江国分寺は瀬田川の近辺に設けられて甲賀寺は廢寺となり、いまは寺域に礎石が完存するだけです。信楽町に史蹟紫香樂宮跡として指定されている土地は甲賀寺の跡です。

東大寺建立の材木はこの近江から伐り出されました。甲賀の杣の木は野洲川の流れを利用して琵琶湖に出され、高島の杣の木は安曇川から琵琶湖を通過して、石山の集積場に運ばれ、石山から瀬田川・宇治川・木津川を利用して木津で陸揚げされて東大寺に運ばれたのです。この材木集積場であった石山に東大寺の出先機関である石山院という役所が設けられましたが、これが石山寺となったのです。

東大寺建立の中心人物は良辨で、この良辨の指図で石山寺の諸堂舎建立も進められて行ったのです。そして東大寺を建てるについての国の役所である造東大寺司の中に、造石山院所という機関が設けられ、石山寺建立の用

材は田上より伐り出されました。石山寺の草創についてのことは正倉院文書によって詳しいことがわかり、本尊造像次第やこれに従事した人々のことまでも知られます。奈良時代の寺院建立次第を明示する当時のやりとりの文書が、多く残されている例はわが国でも大変に少なく、石山寺ほど創建時を史料で知ることの出来る寺院はまれです。しかも今も寺勢をたもつて存在する寺院は、奈良の特定寺院を除いては数多くありません。石山寺が真言宗となったのは真言宗小野派を開いた理源大師聖宝の弟子淳祐からです。

奈良朝廢寺の遺宝

奈良朝廢寺の遺宝として私達の目にふれるものの大多数は瓦ですが、ここでは瓦を除いて礼拝対象となった仏像と仏舎利を見ていきます。仏舎利礼拝は釈迦が印度で仏教をおこした紀元前五世紀よりやや降って、紀元前三



- 1 崇福寺跡
- 2 甲賀寺跡
- 3 石山寺
- 4 南滋賀廢寺跡
- 5 雪野廢寺跡
- 6 近江国分寺跡
- 7 石居廢寺跡

▲奈良朝廢寺位置図



▲雪野廃寺塔跡出土塑像（菩薩顔面）

世紀に初めて見られますが、仏像が造られて崇拝されるようになるのはこれよりさらに遅れた一世紀末においてであります。ガンダーラとマトウラーは仏像が最初に造顕された地方で、仏とは釈迦を指すものであり、仏像とは釈迦像のことでした。しかし時代が降るにつれて大乘仏教の展開と共に多くの諸尊が生まれ、釈迦の他の諸尊像も仏像と総称するようになります。そしてわが国に仏教が伝来した頃には、仏舎利を納置する塔と仏を安置する金堂が寺院の中心をなしていて、法隆寺では金堂に釈迦像が安置され、その仏舎利を納めた塔が、中門内を囲む廻廊の中に金堂と左右に並立していることは、或る意味で仏教の道場としての意義づけを強く示していると思います。塔の初層内部には、塔本四面具と称する釈迦の一生涯の主だった事柄をパノラマ式

に多くの小像で具現化したものを安置しています。法隆寺塔本塑像はこれです。

近江の廃寺で金堂に安置された仏像は伝存していません。現存しているのは雪野廃寺の塔跡から出土した塔本塑像の破片が最も代表的なものです。塑像とは土で造られた仏像で、奈良時代を除いては、鎌倉時代末期の禅僧などの肖像に少しみられますが、大多数は奈良時代に多く用いられた造像材質です。雪野廃寺の塑像断片は菩薩形、天部形などありますが、まとまったものは童形の頭部だけです。童形の顔を眺めると穢れを知らない清々しいふくよかな子供の顔を写し出していて、盛唐文化の写実要素を多分に受けついで秀れた作風を示しています。

雪野廃寺の塔本塑像は釈迦のどのような場面をパノラマ式に表現したのか、残存してい



▲崇福寺跡出土埴仏

る塑像片では推察できませんが、恐らく群像によって釈迦に関連した何かを示したものであったでしょう。雪野廃寺は日野川流域（竜王町川守）に存在して、この川の流域には奈良時代の廃寺がたくさんあります。わが国でも最古ではないかと考えられる奈良時代も早い頃の石塔寺三重石塔は、雪野廃寺より余り遠くないこの川上の流域にあります。石塔寺三重塔は、百濟様式の石塔として解釈されており、雪野廃寺より少し日野川下流の倉橋部にも奈良時代の瓦を出土した寺跡があります。倉橋部は安野郷のうちの集落で、昭和39年平城京朱雀門跡から出土した木簡に「近江国蒲生郡阿伎里人大初上阿伎勝足石」と墨書があって、阿伎勝足石はこの安野郷の人でした。勝は渡来人の子孫の姓を表わしています。この雪野廃寺のある蒲生郡は、百濟滅亡による亡命移民、男女700余人が天智天皇8年(669)ここに移されており、亡命者だけに百濟の上層部の人が多かったと考えられます。雪野廃寺のように立派な塔本四面具が、平城京を離れた近江蒲生郡の逸名寺院にあったということは、百濟様式の石塔寺三重塔とともに、百濟系渡来人の子孫が住みついた蒲生の土地に

彼等の氏寺を建てて、そこに高度の大陸文化を咲かせていたと考えてよいでしょう。

塑像の小破片は天津市の南滋賀廃寺や崇福寺跡からも出土しています。崇福寺跡の三重塔は文献によると四方仏と記されていて、元興寺、興福寺などの文献から推察すると、薬師浄土変・釈迦浄土変・阿弥陀浄土変・弥勒浄土変ではなかったかと思われませんが、材質が塑像であったかどうかは分かりません。昨年天津市石居廃寺にも泥塔の外に塑像の小破片が出土していることを知ったのですが、まだこれは見る機会がなくどのような場所から出たか一度実見したいと考えています。

崇福寺跡からは塑像片の外に埴仏が出土した。完形品はなく断片ですが、復元すると縦15センチメートル余、横12センチメートル余の縦長の板状の上に、如来独尊像が浮き出されていて、挙身光を背にし蓮台上に結跏趺坐しています。これは埴仏ではわが国でも大形に属するもので、これまた近江奈良朝廃寺の遺物に貴重な資料を加えるものです。

おわりに

以上、近江の奈良時代に建立された主だった寺院と遺物を見てきました。この他にも園城寺の前身である大友村主が建立した寺院などいろいろとこの時代の寺院が多く出土瓦によって知られています。今後さらに新しく発見されて、その数を増して行くものと思います。近江の国は、京都に都が置かれてからはいつの時代にも都に近かったことや、わが国最大の湖・琵琶湖があって農耕に適し、水利に富んでいたもので、渡来人が早くから住みつきました。そして都の文化を作り出すのに大きな貢献をしました。一例を挙げると犬上郡火田の資泰絵師集団は、大和の黄文絵師・河内絵師など絵師集団と共に東大寺の建立に従事し、また絵師上村主権、仏工息長丹生真人常人も近江の人でありました。近江に逸名奈良朝廃寺が多い理由も、この渡来系氏族の氏寺が多かったからだを見てよいと考えています。

(宇野茂樹氏提供)